

SNW 報告

シニアネットワーク発足とその意義

このたび原子力学会の中に「シニアネットワーク」(以下 SNW と略)が設立された。初代会長として、この組織の結成の経緯と今後の抱負を紹介し、多くの方のご賛同とご参加を仰ぎたい。

SNW 発足の母体となった「エネルギー問題に発言する会」(私も所属)は、勃興期の原子力職場を経験したリタイヤー組が集まった組織で、エネルギー問題を検討し、時には政府への政策提言、報道機関へのコメントなどを行ってきた。この活動の一環で、ここ1年半、全国の原子力学生と懇談対話も進めてきたが、この結果、今、在籍中の学生のエネルギーに関する意識や認識と、我々シニアとの間にはかなりのギャップがあることを実感した。

資源小国日本は、敗戦後、間髪をいれず到来した^{オイル}油を福音とし、精励精神とともに高度成長の津波に乗り世界第2位の GDP 大国となった。しかし、この恵みもつかの間、早くも^{オイル}ピークが間われ、エネルギー安全保障問題が急進展している。世に「津波は引き波が怖い」のたとえの通り、各国の動きに対し、わが国も遅れをとってはならない。

今の日本は、世界一の長寿命国で、戦前の軍国主義、戦後の国歌・国旗忌避教育、過去の戦争を知らない世代まで、生を受けている4世代の人生哲学や意識は^{まだら}縞模様で、世代間の価値観は層状化現象を起している。

原子力はこの傾向が顕著で、50年前、無資源国にとつ

ての夢と光明と礼賛された時代から、最近の10年余続いた原子力低迷期まで、議論と報道も振れ幅に拍車がかかり、国民の原子力に対する認識は年代でバラバラである。この根本原因は、いつでも買える潤沢な油の存在を信じきった甘さと、世界唯一の被爆国として原子力、放射能嫌いが交錯して形成されたといえる。いまや世界各国がエネルギーを求めて安全保障に走るときに、日本人は、既に崖っぷちに立っている危機感を認識し、身構えねばならない。

「発言する会」は明日を担う若人たちが、エネルギー安全保障の尖兵として、迷いもなく雄飛、活躍できるよう、夢を支援し、人生対話を通じ、日本の現状を認識してもらうための役割を果たさねばならぬと思い、世代間の層状化した意識を攪拌するための行動も展開してきた。

その後、この意に賛同する大学の教育担当の先生、研究機関の方々の参加合流を仰ぎ、原子力学会傘下の SNW としてこのたび組織化し、「発言する会」から学生との対話活動を移管し、さらに対話の対象を拡大すべく、新たに活動を開始したものである。

この SNW 発足と時を同じくして、政府からは力強い「新・国家エネルギー戦略」と「原子力立国」宣言が発表された。国として喫緊な課題であるエネルギー安全保障と地球規模の環境対策の主軸に原子力を置こうという「立国宣言」である。まさにわれわれも永年訴え続けてきたイシューとも合致して、大歓迎するところである。今、国を挙げて改革のためのドラが鳴り響いた、この機会を逸しては手遅れになる。

将来を担う人材の養成は、あせっても時間がかかるテーマである。SNW は、学生の教育方式改革面、また各年代層に対する原子力 PA、これらの活動に対し講師派遣や実働協力も展開して行きたいと思っている。

(シニアネットワーク会長・竹内哲夫)

